様式４（第２条関係）

博士（口腔科学）学位論文内容要旨

受付番号	第　　号※	氏　名	古賀　恵
博士（口腔科学） 学位論文の題名	歯科衛生学生の社会人基礎力に対する臨床実習の効果ならびに自己評価・他者評価に関する分析		

歯科衛生士は職場や地域社会等で多様な人々と仕事を行うことから，知識・技術の習得のみならず，経済産業省の提唱する「社会人基礎力」を身に付けることが必要となる．著者はこれまでに，臨床実習前後の歯科衛生学生の社会人基礎力について，継続的に質問紙調査を行い，「前に踏み出す力」,「考え抜く力」,「チームで働く力」の３つの能力とも臨床実習後には上昇することを示唆する報告を行った．本研究ではさらに，自己評価と他者評価を比較し，歯科衛生学生の社会人基礎力に対する臨床実習の効果について詳細に検討した．

社会人基礎力は，３つの能力（12 の能力要素）から把握できることが明らかにされている．そこでこれら 12 の能力要素を判定する質問紙を作成し，歯科衛生士養成校３校［A 校（4 年制大学)，B 校（短期大学)，C 校（専門学校)］の臨床実習を履修する歯科衛生学生 725 名［A 校：91 名（2 ヵ年）,B 校：496 名（5 ヵ年）,C 校：138 名（3 ヵ年)］を対象に，5 段階評価で質問紙調査を行った．さらに B 校の 91 名（1 ヵ年）を対象に，専任教員６名が自己評価と同様の手法で他者評価を行い，自己評価と他者評価の相違を検討した．調査時期は各養成校の臨床実習直前（以下実習前）と臨床実習途中（以下実習中)，さらに臨床実習直後（以下実習後）とした．本研究では，臨床実習前後での３つの能力および 12 の能力要素の差については，Wilcoxon の符号付き順位検定を，実習前，実習中，実習後は Friedman 検定で検討した．なお本研究は関西福祉科学大学研究倫理審査委員会の承認（承認番号 18-21）を受けて行った．

歯科衛生士養成校３校において，社会人基礎力の３つの能力を臨床実習前後で比較検討した結果,すべての年度でいずれの養成校においても，実習後で有意に上昇した（$p<0.05$）．3 つの能力の中でも「前に踏み出す力」の平均値が，顕著な上昇を示した．12 の能力要素について，実習前後での上昇率をスコア化して検討したところ，3 校とも顕著に上昇する能力要素（働きかけ力，ストレスコントロール力，主体性）が，同じ傾向にあった．B 校については，5 ヵ年分の実習前，実習中，実習後をより詳細に検討したところ，実習前―実習中に有意な差を示す能力要素と，実習中―実習後に有意な差を示す能力要素があった．自己評価と他者評価で検討した結果，実習前は「チームで働く力」のみ，実習中と実習後は全ての能力に有意な差が認められた．

以上の結果より，養成校の形態に関わらず，臨床実習を経験することにより社会人基礎力の向上が図られることが示唆された．特に３つの能力の中でも「前に踏み出す力」の上昇傾向が高かったことから，臨床実習は「前に踏み出す力」の育成に有効であることが示唆された．能力要素ごとの比較検討において，3 校ともに同じ傾向にあったことから，歯科衛生学生は臨床実習において働きかけ力，ストレスコントロール力，主体性の能力要素に影響を及ぼす可能性が示唆された．

自己評価と他者評価の比較検討では，実習前は学生－教員間に大きな差はないが，実習が開始されると，学生と教員間の社会人基礎力に関する評価に，差が生じる可能性が明らかとなった．つまり，社会人基礎力向上の目標に対する認識の不一致もしくは，学生は実習を経験することで，社会人基礎力が向上したと自負するのではないかと考えた．臨床実習は社会人基礎力の３つの能力，12 の能力要素の有機的かつ多面的な育成に有効である可能性が示唆された．今後，より詳細な検討が必要と考えられた．

※欄には記入しないでください。

博士（口腔科学）学位論文審査結果の要旨及び調査委員の氏名

受付番号	甲 第４号	氏　　名	古賀　恵
主　査　神　光一郎		副　査　和唐　雅博	
		副　査　中塚美智子	

「社会人基礎力」の重要性については、経済産業省が提唱しており、同じ医療職では看護師や保健師を対象とした関連研究・論文は散見される。研究者は、国内外の先行研究や文献を十分に調べており、その内容について緒言で述べているが、歯科衛生士を対象とした「社会人基礎力について継続的かつ詳細に検討した事例はほとんどない。その点では、本研究・論文の新規性や意欲性は評価されるべきところであり、様々な視点からアプローチした詳細な分析結果は、新たな知見を得るものである。

研究者は、特に臨床実習が社会人基礎力にもたらす効果に着目し、臨床実習前・実習中・実習後において社会人基礎力の３つの能力および 12 の能力要素の変化を詳細に捉え分析・評価を行っている。また、対象者として捉えるべき歯科衛生士養成校の類型（専門学校、短期大学、大学）すべての学生に対して、3～5 年間のコホート調査を行うことにより、養成校の類型や養成期間、実習プログラム、学年特性の相違によって生じる可能性のあるバイアスを最小限にとどめる工夫をしている。また、調査データを適切な解析手法を用いて詳細に分析しており、得られた分析データを正しく評価・検討している。

その結果、どの養成校においても「前に踏み出す力」が顕著な上昇を示しており、実習前後の変化では養成校の類型に関わらず「働きかけ力」「ストレスコントロール力」「主体性」の評価項目において有意に上昇傾向を示す結果が得られていることは注目に値する内容である。

また、社会人基礎力を学生自身の自己評価だけで分析するのではなく、専任教員による他者評価も行うことで、臨床実習前・中・後における両者による評価の動きや差異を正確に捉えることが可能となり、その差異が目標に対する不一致、もしくは経験による自負について生じていることを考察していることも研究者ならではの新たな視点であると評価する。論文における文章表現は、読者に分かりやすい表現に終始しながらも今後の歯科衛生士教育に有用となるべきポイントをしっかりと捉え、かつ詳細に示しているため、読者にとっては理解しやすい論文構成となっている点も評価に値する。

本研究からもたらされる結果は、今までの先行研究では得られていなかった貴重な知見であると考える。すなわち、今後の歯科衛生士養成課程における応用が可能な素晴らしい内容であり、歯科衛生士教育の発展に寄与できるものとなっている。よって、本研究ならびに論文は、博士（口腔科学）の学位に相応しいものであると評価する。

最終試験結果の要旨及び博士（口腔科学）学位授与審査調査委員の氏名

受付番号	甲 第４号	氏　　名	古賀　惠

主　査　神　光一郎	副　査　和唐雅博 副　査　中塚美智子

（最終試験結果の要旨）

大学院医療保健学研究科（博士（口腔科学）学位授与調査会調査委員）の行った試験に合格した。